

《λ ó γ ο ς》と情報

今 泉 晴 行

λ ó γ ο ς et ℓ'information

IMAIZUMI, Haruyuki

はじめに

わたしたちは何かを知りたい時に、ネットを開くことがあります。ネットでは自分が知りたいキーワードを打ち込み、検索します。そして、そこから得た「知」は、わたしたちにとって有益な「情報」です。また、わたしたちは本や雑誌などの印刷物やテレビ、ラジオなどの媒体を通して様々な知識を吸収します。

太古からの人間と人間との関わりのなかで、文字のない時代の口承を始め、文字ができた時代においても、口述を通して、また記述を通して、諸情報が伝達されます。即ち、わたしたちにとって情報とは「知」の獲得であり、「意味を有するもの」、そして「価値を持つもの」ということができます。

この情報の伝達には主として言語が用いられます。時には象徴が使われることがありますが、ほとんどの場合「言の葉」が媒介します。ひとは見渡す限りの大地や草原を、恣意的に線引きし境界を設け、他者の所有と区分し、自己の名をかぶせ所有を宣言し、権利を主張してきました。この「言の葉」による言語表現もひとつの「存在」を恣意的に区分し分節した言語機能によって行われます。それは「こと」と、それを任意に切り取った人為的な「コトバ」によるものです。

「こと」と「コトバ」との関係を少し考えていきたいとおもいます。

・事（こと）と事の端（ことのは 言の葉）…「コトバ」に転化できるもの

1. 「コトバ」化と非「コトバ」化

わたしたちが「何」かを他者に伝えようとする時、その思念をそっくり有りのまま伝達することはできない。必ず媒介を通してしか伝えることができないのは、残念ながら自明のことである。ある思念を情報伝達するためには、伝達者は被伝達者が当然理解できる「なにもの」かを道具として用い、「情報」を記号化するしかない。

そのために先人は木の枝を結び付け、縄を巻き、石を積んだ。また、木や石を叩き音を出し洞窟に絵を画いた。やがて、その思念は「コトバ」化された行為と、「コトバ」化されない信号、符謀象徴的あるいは芸術表現行為としてみられるようになった。

「コトバ」化された表現行為が可能になるためには、伝達者と被伝達者、両者の間で共通理解され

る基盤が存在することが必要である。ひとは「なに」か伝達意図を持つ場合、その意図を「コトバ」に転化させなければならない。そのためには視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚を総動員してはたらかせ、自分の「思念」をこの五感で把捉しなければならない。次にひとは、把捉し、意識化し認識したものを、「コトバ」化していく。そして「思念」に「コトバ」をかぶせ置換していく表現化の過程で、適切十分と思われる「コトバ」を対置させていく。常時、適切な表現が見い出されるわけでもなく、大抵は近似値の出来合いの「コトバ」を当て嵌めていくしかない。適切十分とおもわれる表現を見出し、伝達したと思っても、同一文化圏で生活している被伝達者が、個別的状況のなかで、被伝達時の創造力の多種多様の作用の在り方によっては、その「コトバ」の記号を、伝達者の発信意図通りに受信してくれない可能性は常に必ず残る。

また、これまでの過程で、ある意味で、わたしたちは、みづからの意志伝達手段として媒介する記号としての「コトバ」そのものが、わたしたちの「感性の有り様」・「認識の仕方」に翳を落とし、わたしたちの思念を知らず識らずのうちに絡めとり制約していることを忘れてはならない。

2. 「名」と分節

一応の「コトバ」という表現行為が可能となる前提として、人々がそれぞれの文化のなかで、人為的に「もの」に一つ一つ呼称を定めてきたということがある。その文化に属してきた人々が、関心を持ち必要と感じてきた事象には、細分化された「名前」が貼り付けられ、人々が「意味」を感じる《ひとまとまり》を恣意的に他から截断し、区別し、分節してきた。

人間はみづから創案し造出したものに関しては、その時々自由に呼称を定めてきた。その呼称は一つの約束事であり、記号である。そして、その「もの」を創出した者が「みづから」名付け親になることができる。このことは、創案者のひとつの特権であり、他の人々への自己の宣言でもあった。それは、自分の子どもの「名」を親であるひとが勝手に付けることに通じることなのかもしれない。

人間の手に依らず、既に外界に存在していた「事象」をはじめ、ひとびとが創案した「もの」にも、わたしたちは言語による名称化を果たしてきた。「名」を付けるということは、「自己」の所有表明だけではなく、自己との連関が深甚であることのあらわれである。また、唯一無二の、他とは異なる懸け換えのないただひとつの《事物》として、大切に扱う行為のなかに、「他」を区別し、「異」なるを仕分け、制限する行為が潜んでいることは見逃せない。「名」を付けるということは、そういう意味で諸刃の剣であるということができる。

更に言えることとして、たとえば「義男」、「正子」という「名」を担う人が、「実」はそうではない場合も多々みられる。「名」と「実」がそぐわなかったり、齟齬をきたしたり、乖離している場合もあるだろう。しかし、それは「命名者」の希（ねが）い、祈りなのかもしれない。

「名」を付けるということ、それは、また、人々の利便性のためであり、他の人々との交流、情報交換のために必要なことであった。

ある意味では、それは人間が社会生活を果たすために不可欠なことであるのかもしれない。

3. 「コトバ」と意味

かつて、言語に関して、F. de Saussure が分析したように、「コトバ」は一つの記号であり、その記号は記号表現と記号内容という双面性を持つと理解された。知られているように signifiant と signifie に細分しながらも、記号は、その用いられている状況のなかで、「なににか」にひとを差し向けると考えられた。

ひとは「コトバ」という記号を耳目にすることで、ひとつの「心象」反応を持つ。そして、それは分節された他を差異化する「意味」をひとに付与することになる。「そのものがそのものである」ために、自己同一性という「コトバ」が用いられるが、言語の本来の意義は、そのものはそのものであって異なるなにもものでもないことという点にある。ここにも、自己が自己であるためには、他を切り分けることでしかみづからを明らかにできない「コトバ」のひとつの性格がみられる。

また、ひとが「なに」かを他のひとに伝達しようと意図するとき、必ず伝えたい「意味」を、「コトバ」という記号は担っている。

例えば、今日わたしたちは昼と夜を組み合わせ一日としているが、かつて民族によっては、昼と夜とはまったく相容れない別物であり、一日の構成要素として貼り合わせるなど考え及びもしなかった。いまわたしたちは昼と夜を一組として一日を形作ることになっている、と記したが、別の観点からいえば、一日は朝、昼、夕、夜に分けられるということもできる。「一年」を、春、夏、秋、冬と四季に分類するのも、十二ヶ月に分月するのも、二十四節季と同様、まったく恣意的であり、便宜的な呼称を与えているだけである。春が暑くて、夏が冷夏、秋に雪が降ることも珍しくはない。「暑い時」、「寒い時」ということも、発語者個人の感性、民族、地域の特異性に関わることでしかない。

それでは、一つの呼称を付与されたひとりの「ひと」が、赤ん坊、少年・少女、青年、中年、老年、どの時期にあっても、また、その具有する種々様々な形体が変化、変質しても、同一の呼称を担うということ、わたしたちはどう考えればいいのか。

このように、分節され「コトバ」化された「存在」自体は変容しても、同一の意味を担う「コトバ」を背負っていくことになる。

そして、「言(こと)」と「言の葉」が乖離してしまい、「コトバ」が独り歩きをすることになるのである。

・「コトバ」に転化されない「こと」

1. 「有」と「時」

五感を超えたり、またその網の目を擦り抜けていく「なにか」に向かう際、「コトバ」化しにくい事象に、わたしたちはどう対処すればいいのか。

前項でも少し考えてみたが、ある意味では、「時」というものは本当に「ある」のだろうか。

古代末期から、時間的な経過のなかで、ひとは物事を考えてきた。確かに「時間」的思考は利便性に富み、平面的思考だけではなく、より総合的に思索することを可能とするが、時間的な経過と共に、様々な時期の「自己」を知り、どれが真の「自己」であるかひとは戸惑うことはないのだろうか。もちろんすべてが「自己」ではあろうが…。様々だった自己は「過去」であり、様々に想い描く「未来」は不確実で、あるかどうかさえ分からない。ただ確かなのは一瞬一瞬過ぎさっていく「いま」しかないということではないだろうか。通時的という語彙も用いられているが、「時間的な経過のなかで考える」というのは、ある一面はよく理解できるかもしれないが、やはり人間にとって都合がいいからだけではないのだろうか？

正法眼蔵第二十の「有時」に

「山も時なり、海も時なり。時にあらざれば、山海あるべからず、

山海の而今に時あらずとすべからず。

時もし壊すれば山海も壊す、時もし不壊なれば山海も不壊なり。」

と記し、少し前には、以下のように記されている。

「松も時なり、竹も時なり。

時は飛去するとのみ解会すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。

時もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし。

有時の道を経聞せざるは、すぎぬるとのみ学するによりてなり。

要をとりていはば、尽界にあらゆる尽有は、つらなりながら時々なり。

有時なるによりて吾有時なり。」

「有時」の緒言にも、「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。」と記され、「わたし」は「時」と共にあるという。「有」は「時」なくしてはあり得ず、「有」は「時」であるという。ここでは、「コトバ」の意味はどうなるのだろうか。

「有時」のあとに、「授記」がつづく。

「身前に授記あり、身後に授記あり。

自己に知らるる授記あり、自己にしられざる授記あり。

他をしてしらしむる授記あり。他をしてしらしめざる授記あり。

まさにするべし、授記は自己を現成せり。授記これ現成の自己なり。

このゆゑに仏々祖々、嫡々相承せるは、これたゞ授記のみなり。

いかにいはんや山河大地、須弥巨海あらんや。

さらに一箇半箇の張三季四なきなり。

かくのごとく参究する授記は、道得一句なり、聞得一句なり。

不会一句なり、会取一句なり。行取なり、説取なり。退歩を教令せしむ。

いま得坐被衣、これ古来の得授記にあらざれば現成せざるなり。

合掌頂戴なるがゆゑに現成は授記なり。」

重ねて、

「しるべし、一塵なほ無上なり。一塵なほ向上なり。

授記なんぞ一塵ならざらん。

授記なんぞ一法ならざらん。

授記なんぞ万法ならざらん。

授記なんぞ修証ならざらん。

授記なんぞ仏祖ならざらん。

授記なんぞ功夫辨道ならざらん。

授記なんぞ大悟大迷ならざらん。」

この後につづけて、次のように綴られている。

「授記はこれ吾宗到汝、大興于世なり。

授記はこれ汝亦如是、吾亦如是なり。

授記これ標榜なり。

授記これ何必なり。

授記これ破顔微笑なり。

授記これ生死去来なり。

授記これ尽十方界

授記これ徧界不曾蔵なり。」

ある事象を的確に捉え、そして、それを伝達するために、わたしたちには、ある意味では、「コトバ」という手段、道具しかないのかもしれない。しかし反面、この道具である「コトバ」は、知らず識らずのうちに、わたしたちの思念や価値感に翳を下し、逆にわたしたちを縛ってしまうという面も具えている。ある人がある事象を他のひとに伝えるという「はたらきかけ」は、この「コトバ」を通して、「コトバ」を超えて、言葉にならない意味や価値、実在などの「情報」さえも伝達することもできる。その意味は、通常用いられる意味、即ち、大野晋のいう「その語の指す、物や事柄や、観念（註1）」を超えている。「意味の意味」、意味を超えた意味とでもいえばいいのだろうか。ジャンケレヴィッチは、「死」に関してのインタビューで、「生に意味を与えるのは意味の不在」とも語っている（註2）。それは 〃 の外在化ということができるのではないだろうか。

2. 「ありてあるもの」

出エジプト記には、「エジプトへの使命を下されたモーゼが、神に対して、その「名」を問うが、それに応えた以下のような記述がある。

「モーゼは神に尋ねた。今、イスラエルの人々のところに参ります。

彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです。』

と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがひありません。

彼らに何と答えるべきでしょうか。」 神はモーゼに、

「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、

また、「イスラエルの人々にこういふがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。

これこそ、とこしえにわたしの名。これこそ、世々にわたしの呼び名。

（出エジプト 3,13～14）」

これに基づいて、更にヨハネは記す。

「あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。

だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる」とわたしは言ったのである。

『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。（ヨハネ 8,23b～24）」

黙示録のなかにも、「今おられ、かつておられ、やがてこられる方」という似た言い回しが三度みられる（註3）。人はみづからが作り上げたものにしか、みづからが考案した「コトバ」を用いることはできない。例えばわたしたちの生誕は、日本語では「生まれる」という言い回しをとるが、外国語では受身形、受動態を用いて表現する。「生まれさせられた」というほうが正確ということもいえる。それでは、「生まれさせた存在」に対して、わたしたちにはどのような呼称が許されるのだろうか。

ルカによる福音書にイザヤを引用して記された箇所がある。

「主の霊がわたしの上におられる

貧しい人に福音を告げ知らせるために、

主がわたしに油を注がれたからである。

主がわたしを遣わされたのは、

捕らわれている人に解放を、

眼の見えない人に視力の解放を告げ、

圧迫されている人を自由にし、

主の恵みの年を告げるためである。」（ルカによる福音書 4,18）

ここに用いられている「年」という「コトバ」は、具体的な「恵み」の年を指しているだけではなく、「救い」の事実をも指しているのである。時間的な用語である「年」が、存在的な「救い」を指す。時が「こと」と融合するのである。「年」が「出来事」を示し、福音を顕すのである。そして、その福音を宣布するのである。

と

わたしたちの日常生活はすべて「コトバ」を通して行われている。たしかに「コトバ」があることで、他者との情報伝達がより簡便になった。

わたしたちが他者になにかを「情報」伝達しようとする、その時点で、どのように伝えようか、どのような伝え方をしたら真意が伝わるかと思考する。

また、他者との「情報」伝達だけではなく、自己との自問自答さえ「コトバ」抜きでは果たされない。自分自身に何かを納得させようとする時は、やはり『わたし』に向かって『わたし』は、「コトバ」を用いるしかない。

そして、わたしたちは「コトバ」で言表しようとする、「
」をほしいままに切り刻み分節せざるを得ない。その時点で、既に「コトバ」に縛られ、その制約下に閉じこめられ、押し込められる。

また「大乘起信論」に関して、井筒俊彦氏が「意識の形而上学」で記しているように、全一態である「真如は一方において『無』的、『空』的絶対非顕現、他方においては『有』的・現象的自己顕現」を示す。そして、尚、現象と非現象とのあいだに及ぶ二面性に関して、次のように記している。

「心生滅者。依如来蔵故有生滅心所

謂不生不滅與生滅和合非一非異。

名爲阿黎耶識。」(註4)

さらに、東洋だけではなく、ギリシアの哲人ヘラクレイトスのその「言葉」のなかにも以下のようなものが見られる。

「全きものと全からざるものとはいっしょにつながっている。行くところの同じものも違うものも、調子の合うものも合わないものもひとつづきだ。万物から一が出てくるし、一から万物も出てくる。」(註5)

大乘起信論の「真如」であろうと、ヘラクレイトスの「一」であろうと、人間が随意に付けた「仮名」であり、一切の限定を超えた「名づけ得ぬもの」を、敢えて「コトバ」化しただけのことである。「コトバ」を凌駕するものを、仮称しただけのことである。

また、ある意味では、大文字である「
」が、時々刻々個別存在態・小文字の「
」として現象していくと言表も可能ではないだろうか。

「ひと」と「ひと」との関わりのなかで、わたしたちは万象を名づけ、表層にはあらわれない内面の心の動きさえも「愛」とか「憎しみ」などと「コトバ」で仕切っていく。丸山圭三郎氏の指摘を待つまでもなく、「愛」、「love」、「amour」、「Liebe」では、日本語になるとすべて「愛」と訳されるが、それぞれの伝統社会のなかで用いられる個有の微妙な彩(いろ)あい、陰影、意味合いは抜け落ちていくような気がしてならない。また、同じ文化伝統のなかに生まれ生きている人間のなかでも、個有の「経験」のうちに、各自の一つひとつの「コトバ」から感受するニュアンスが異なる場合も多い。

谷川俊太郎氏に「鳥」という詩がある。

「鳥は名づけない
鳥は空を飛ぶだけだ
虫を名づけない
鳥は虫を食べるだけだ
鳥は愛を名づけない
ただ二人で生きていくだけだ

(中略)

鳥は生を名づけない
鳥はただ動いているだけだ
鳥は死を名づけない
鳥はただ動かなくなるだけだ」

鳥は「あるがままを」を切り刻んだりしない。ただあるがままを受け入れて「飛ぶだけ」「動くだけ」「ただ」「生きるだけ」である。

ところが、わたしたち人間はの「歴史」のうちに、「ある」を随意に切り取り「名づけ」、分節してきた。そして逆に、みづからの有意味的「分節」に、自分自身が身動きがとれなくなってしまう。さらに、事象、物象を「ありのまま」看ようとせず、「コトバ」で知ろうとしてしまう。その挙げ句、自分さえも見失い、なにも見えなくなってしまう。ことば自体の「意味」もそれぞれ分節されながらも、「語の意味は自分独りで存在しているものではない。自分に似た意味を持つ語を自分の周囲に置いて、相互に対立と緊張の関係を保ちながら、各自の意味の独自性を主張している」(註6)という在り方をしているのである。それは「意識」と「存在」の在り方と相似しているのかもしれない。

ただ、ひとの「コトバ」の限りを知るのみである。

おわりに

わたしたちは、自分自身やだれかのことを大切に想う心情、心持ちを、みづから気づき、認識し、ある程度「コトバ」にすることもできます。しかし、逆にわたしたち自身が、他者にどれほど愛されているかは気づきにくいし、解りにくいし、言い尽くせもしません。

実際わたしたちが「愛」や「慈しみ」について語る時、どのように語っても、意を尽くしたとの想いは決して持つことはできません。また語り方、語彙の選択等々、こちら側の責もさることながら、これらのことが本来的に「コトバ」を遥か隔絶していることは否めません。それでもわたしたちが能動的に「慈しみ」を覚えることは、当然自分でも識ることができます。しかし、受動的に「慈しみ」を受けていることがあるのならば、わたしたちはそれをどうしたら識ることができるのでしょうか。また「大いなるまことの言葉」(註7)をどうしたら識ることができるのでしょうか。

《註1》『日本語をさかのぼる』大野晋著，p.15，1975年刊，岩波書店

《註2》『死とはなにか』ヴラジミール・ジャンケレヴィッチ著，p.49，2003年刊，青弓社

《註3》『黙示録』1,4．8．4,8

《註4》『大乘起信論』馬鳴菩薩造、梁天竺三藏法師眞諦譯、生滅心の法 - 染淨生滅，p.12，1994年刊，
永旧文昌堂

《註5》『ギリシア思想大系』ヘラクレスの言葉，p.33，1965年刊，筑摩書房

《註6》『日本語をさかのぼる』大野晋著，p.17，1974年刊，岩波書店

《註7》『生きて死ぬ智慧』柳澤桂子，p.30，2006年刊，小学館